

キャラクター名 プレイヤー名

メインクラス	アコライト	Lv.1:		レベル	1
サポートクラス	セージ	Lv.1:	セージ	性別	?
称号クラス				年齢	?
種族	エルダナーン			境遇	天啓
出自 (効果)	冒険者			目標	扶養

	筋力	器用	敏捷	知力	感知	精神	幸運
基本値	7	8	9	15	7	12	7
ボーナス	2	2	3	5	2	4	2
クラス修正	0	1	0	2	1	1	1
他修正				1			
能力値	2	3	3	8	3	5	3

HP	27
MP	38
フェイト	5

装備品		射程	命中	攻撃	回避	物防	魔防	行動	移動
右手									
左手	ラウンドシールド		0	0	0	3	0	-1	0
頭部	ハット					1			
胴部	ローブ					2			
補助									
装身具	知識の書								
能力値			3	0	3	0	5	6	7
スキル									
その他									
総計(右)			3	0					
総計(左)			3	0	3	6	5	5	7
総計(両)									m
ダイス数			2 d	2 d	2 d				

	能力値	スキル	その他	合計	ダイス数
トラップ探知	3			3	+ 2 d
トラップ解除	3			3	+ 2 d
危険感知	3			3	+ 2 d
エネミー識別	8			8	+ 2 d
アイテム鑑定	8			8	+ 2 d
魔術判定	8			8	+ 2 d
呪歌判定					+ d
錬金術判定					+ d

所持品	
冒険者セット	
MPポーション	

現在重量: 6
 最大重量: 7
 所持金: 10
 預金・借金:

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
マジックセンス	★	-	パッシヴ	-	自身	-		
効果: 作成時に知力基本値+3								
プロテクション	1	3	DR直後	20m	単体	自動成功	1/MP	
効果: 対象が受ける予定のダメージに-[SLd]								
ヒール	1	4	メジャー	20M	単体	魔術		
効果: 3D+5のHP回復								
ホーリーライト	1	6	メジャー	20M	単体	魔術		
効果: 2D+2の貫通魔法攻撃ダメージを与えると妖魔、魔族、魔獣に威圧付与								
エンサイクロペディア	1		セットアップ	視界	単体	知力		
効果: エネミー識別を行う								
エフィシエント	1		パッシヴ	自身				
効果: ダメージ、HP回復、ダメージ軽減の魔法の効果+2								
ファーストエイド	1		メジャー	至近	単体			
効果: 難易度10の【器用】判定。対象を蘇生								
リムーブトラップ	1		パッシヴ					
効果: トラップ解除判定+1D								
	1							
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								

サンプルキャラ: 叡智の神官
 出自: 冒険者 あなたの親もまた、あなたのように<冒険者だった>。簡単な冒険に連れて行ってもらったこともある。 《リムーブトラップ》
 境遇: 天啓 あなたはある日神の声を聴いた。あなたは神に選ばれた存在なのだ。[月・予言・魔術] プリガンティア
 目的: 扶養 あなたは家族などを養うために行動している。あなたの稼ぎが彼らの糧なのだ。止めるわけにはいかない。

<時に賢者として知識を伝えるために赴き、時に物語を残すために死地に赴く。>

――生まれ――
 年齢不詳、性別不明のエルダナーン、エルダナーンは透き通っていて美しい個体が多いが、私はその中でも漆黒の髪に赤き瞳を持って生まれた、一種の珍しい種だ。親という存在は、互いに透き通った銀色の髪をしていた中で生まれた漆黒の髪、暗く美しい<レイラ>という名が与えられた。

――親・冒険者――
 親という存在は神殿から神具を探し出す仕事をしていた。詳細はわからないが、そのために数々の場所を訪れたことは覚えている。だが、全てを覚えられるわけではなく、ある時から文字に残すことを行っていた。最初はただの日記程度のもだったが、年月を重ねるにあたってそれは文献となり、書物となることだろう。親という存在は時に言う冒険者と呼ばれるようになりその頃には親という存在は消えていた。年齢か、事故か細かなことはわからないが、親という存在は生を全うしたのだろう。私はそう書物に残しながら独り旅を始めた。

――きっかけ――
 私も旅をする中で様々な地を歩き、知識を探究した。その旅の途中で出会ったヒューリンの子供たちは、私の書く文字に興味を示したのだ、私はどこかであったかもしれない物語として子供たちに語り続けた。自ら